



常陸大宮市の北東に位置する諸沢地区には、古来よりその土地に伝わる伝承が数多く残されています。今回は、その中から、伝承の舞台となった場所について紹介します。

☆籠岩（籠岩）

籠岩は、大子町との境にそびえる籠岩山の一角に位置します。周囲はハイキングコースになっていて、籠岩山を一望できる展望台から下へ降ったところに籠岩の入口がありますが、足元が大変滑りやすくなっているため、訪れる際には注意が必要です。籠岩山は集塊岩（男体山火山角礫岩）と砂岩から構成され、長い年月の経過により徐々に風化することで、大小さまざまな岩窟ができました。

今回紹介する籠岩もそのひとつ。岩窟には阿弥陀如来と思われる石仏1体のほか、16体の小さな石仏が安置されています。また、岩窟にはしごが架けられ、奥ノ院と呼ばれる上部の岩窟に登ることができます。

『山方町誌』の記述によると、奥ノ院から西へ50メートル進むと不動明王の石仏が祀られているという記述がありますが、そちらについては確認できていません。



籠岩

☆合戦の舞台となった？

文化4（1807）年に成立した『水府志料』には、当時の籠岩に関する記述を見ることができます。

かこ岩 上山といへる地にあり。石山なり。石穴あり。此処より矢の根出る事あり。里人所持せしものまゝあり。如何のゆへなるやを知らず。年久しく土中に埋りしものと見へて、其の形全からず。按に、此の地は金砂山へ隣る村なれば、金砂合戦の時より埋りしものならんか。大きき図するが如し。〈図略〉

この記述によると、江戸時代後期ごろには、籠岩から多くの鍬が出土していたことがうかがえます。諸沢地区は、治承4（1180）年11月に源頼朝と佐竹氏が戦った金砂山合戦の舞台となっており、この地が戦場となったことも十分に考えられます。

☆籠岩に伝わる伝説

「籠岩」という名前については、大小あらゆる岩窟が籠の目のように見えることから来ていると考えられますが、一説によると、籠岩はかつて「神籠もる岩」と呼ばれており、暴れた籠を仙道上人という僧が鎮め、この地に祀ったという言い伝えがあります。『山方町誌』にある不動明王は、この上人の功績をたたえて建てたものだとされています。また、籠岩に祀られた計17体の石仏は、釈迦如来と十六羅漢ではないかという説もありますが、本尊が阿弥陀如来に見えることもあり、詳しいことは分かっていません。これらの石仏は、銘文により、諸沢村（現常陸大宮市諸沢）や頃藤村（現大子町頃藤）など、近隣に住む村人によって寄進されたことがわかっています。人々にとって特別な場所だったのでしょうか。

今回は籠岩のみの紹介ですが、険しい岩山があり、修験道とも関わり深い諸沢地区には、伝承の舞台となる場所が数多く存在しています。今後も調査を続けますので、情報をぜひお寄せください。



籠岩に祀られた石仏群

※相沢利通さん、金子理一郎さん、木村宏さん、小林久さんにご協力いただきました。

<参考文献（一部）>

- ・『山方町誌 下巻』山方町教育委員会、昭和57年
- ・堀江文男著『語り継ぎたい 奥久慈の秘話 改訂版』平成8年

■問い合わせ■

文化スポーツ課 文化・スポーツグループ
☎ 52-11111（内線 344）